

Rotrou : *Céliane*

ジャンル 五幕韻文悲喜劇
 初演 1631年頃 オテル・ド・ブルゴーニュ座
 出版 1637年
 出典 デュルフェの『アストレ』に類似のエピソードあり。

ランカスターはこの作品について「面白くはないが、構成が悪い。ただ、人物を描こうとする作者の努力が評価してよい」と総括している。概ねその通りである。しかし、秩序立った構成にするには、三組目のカップル（フィリドールとジュリ）が登場する必然性はないと彼は述べているのだが、人物として興味深く描かれているのは実はジュリだけである。他は多少の工夫がなされているとはいえ、ステレオタイプの人物だ。一応、恋と友情との葛藤のテーマが前面に押し出されているが、友情についていくらかでも個性的で真摯な述懐がパンフィルやフロリマンの口から漏れることはない。しかもどう見ても「友情」はパンフィルの側にしかない。フロリマンは凡庸でわがままな若者で、この点、「兄が死ぬ死ぬってわめいても、二カ月もすれば忘れちゃうわよ」というジュリの見解には現実味がある。そういえば自殺未遂が5回もある作品も珍しい。つまりこれらの自殺未遂は観客の了解をも前提にした人物の甘えのポーズで、死の身振りは恋のゲームに必須のルールだと語っている。田園劇の踏襲もここまでくるとパロディー寸前である。時は二日にわたり、場所はフロリマンの家と近くの森周辺だが、マウロは上手に家、下手に森、中央に洞窟の透視図という舞台を製作している。

【第一幕】パンフィル(Pamphile)はニーズ(Nise)と恋仲。だが彼女が事実無根の不貞を疑い責めるので、耐えられず出奔し、親友のフロリマン(Florimant) に会いに来た。思い悩んだパンフィルは森の中で眠り込んでしまう。そこへ騎士の姿のニーズが現れる。彼を追って旅に出たのだが、多情な男に恋した自分が情けなく、絶望して自刃しようとする。ちょうど目覚めたパンフィルはあわてて止めるが、彼女は彼を見てあらためて怒りを燃やし罵倒する。彼の方はニーズとわからず無礼なやつだと怒り、二人は一戦を交える。ニーズは傷を負い、倒れる。やっと恋人だと気づいた彼は介抱し、なおも罵る彼女を宥め、変わらぬ愛を誓う。一方フロリマンが恋しているのはセリアーナ(Céliane) だ。彼女は嫌味な男フィリドール(Philidor)にも言い寄られている。

【第二幕】フロリマンを長い間じらしてきたセリアーナだったが、ついに接吻を許してしまう。彼は狂喜するが彼女は不安だ。おあずけをしている間は女の力は持続するが、一端許し始めると男は女への敬意を失い、愛も薄れてゆくのではないかと。彼はそんな彼女の不安を打ち消し、二人はさらなる喜びを味わうため森の奥に入っていく。さて、ニーズの傷は軽傷で、床に就いたままパンフィルと結婚の約束をする。婚約者の胸に接吻し、恍惚となるパンフィル。そうこうするうち日が暮れる。森から出てきたセリアーナとフロリマンは、フィ

リドールにつかまってしまった。何があったかすぐ見て取ったフィリドールは嫉妬から難癖をつけ、抜刀してフロリマンと戦う。だがパンフィルが止めに入り、フィリドールは捨て台詞を残して去る。

〔第三幕〕フロリマンは悩んでいる。恋人と親友の両方を裏切ってしまった。つまり彼はニーズに一目惚れをしてしまったのだ。そんな彼の自責に満ちた独白をパンフィルが耳にし、恋より友情が大切、自分は身を引く、と申し出る。恥じたフロリマンは短剣で自殺を図るがパンフィルに剣を取りあげられる。俺を信用しろ、ニーズを説得してやる、と言う親友に感謝するフロリマン。だがニーズはもちろん簡単には説得されない。怒る彼女を前にしてパンフィルは剣で自殺を図る。あなたに死なれるよりはまし、と彼女は涙をのんでフロリマンを受け入れることを承諾。

〔第四幕〕ニーズがフロリマンのもとにつれてこられる。「君の悩みは今夜にも雲散霧消する、この美女が君の寝床に入ることでね」とパンフィル。フロリマンは有頂天だ。が、パンフィルの悲痛な表情を目にして愕然。自らの理不尽な要求に気づき、まともや自殺しようとする。まともや友が止め、男二人は女一人を譲り合う。結局、恋人に「もう愛してないから」とまで言われたニーズは、男たちの友情に呆然としつつ惨めな思いでフロリマンを受容する。さて、セリアーナは怒りと絶望で気も狂わんばかりだ。花籠を抱えて庭師に変装し、新たなカップルの語らいを盗み聞きしようとする。しかし近づいてきたフィリドールにすぐ正体を見破られ、退散。恋する女にいつも冷淡にされ意気消沈するフィリドールだったが、そんな彼に恋する女もいる。フロリマンの妹、ジュリ(Julie)だ。彼女の悩みは、好きな男の前でふざけ半分の口調でしか話せず、まともに聞いてもらえないこと。たとえ恋の告白でさえ。彼女はニーズが毒をあおって死のうとするのを阻止し、理性をもって、ニーズ自身の意志を表明すればすむことだと説く。庭師に扮したままのセリアーナも仲間に入れ、ジュリは事態を解決するための策略を練る。

〔第五幕〕ジュリの策略とは、ニーズと庭師のセリアーナの密会場面をフロリマンに見せ、彼に愛想尽かしをさせようというもの。計算通り彼は仰天、すかさずジュリは悲嘆のあまり姿を消したパンフィルを探しに彼をやる。さらに彼女はフィリドールにも「狂った」セリアーナが見すばらしい男装でニーズを口説いている場面を見せてショックを与え、理性的な自分だったら嫉妬に狂うことはないとは断言。虚々実々のやりとりの末、ジュリとフィリドールは愛を誓い合う。一方フロリマンは、森の中で自殺寸前のパンフィルを見つけ、変事が起こったと家に連れ帰る。ジュリが彼らを導き、身分違いの恋に酔う不届きな二人がまさに接吻しようとする現場に踏み込む。やっとセリアーナの男装が明らかになれば、女たちは自分たちの真情を述べ、男たちは許しを乞う。勝ち誇るジュリ。三組の結婚が行われるだろう。愛の奇跡を讃えよう。

(鈴木美穂)

Rotrou : *Pèlerine amoureuse*

ジャンル 五幕韻文悲喜劇
初演 1632～1633 年頃 (ランカスター) オテル・ド・ブルゴーニュ座
出版 1637 年
出典 Girolamo Bargagli : *La Pellegrina* (小説、1589 年出版)

筋の展開が錯綜していて、要約が非常に困難な作品である。ランカスターは、「作者は自らの脚色で筋の運びをぎこちなくしたが、脚色の大半は面白くなくはない」と、『セリアーナ』と似たようなニュアンスの評価を下している。ロトルー独自のアレンジは、セリの役割を拡大したこと、レアンドルの画家への変装、大祭司の登場 (ランカスターによれば『アストレ』の模倣)、リュシドールの従僕フィリダンの「評論家兼詩人ぶり」などで、さらに、佯狂、トルコ人による誘拐、同名の二人の取り違えといった時代の好みはしっかりおさえている。現代人に興味深いのはフィリダンで、「このご時世じゃ、賢い男は財産と結婚するんですよ」「頭のいい女はどうしても煩わしいもんです」という台詞は、当時支配的な (今もなお残存しているが) 結婚観、女性観をそのまま表している。時は半日程度と短い。舞台はフローレンス (イタリア) だが、場所の言及はリヨン (フランス)、ヴァレンシア (スペイン)、ビザンチン (トルコ) とヨーロッパ各地に及ぶ。

【第一幕】フローレンス。リュシドール(Lucidor) は金持ち娘セリ(Célie) と婚約している。経済的理由からの婚約で、彼の心には亡きアンジェリク(Angélique) の面影が焼きついている。彼女とはリヨンで出会い深く愛し合ったが、一時帰郷が長引いている間に死を知らされたのだ。だがセリとの関係も前途多難のようだ。明らかに望みがないのに現実を認識できず、いつまでもセリを諦めないおめでたい男、セリアント(Céliante)の存在は別にして、肝心のセリが精神に異常をきたしているようなのだ。自分は月の女神だと言ってみたり、荒れ狂ってリュシドールに殴りかかったりする。彼女の父親エラスム(Erasme)の心痛もこの上ない。実はこれは佯狂で、父が決めた婚約者を追い払い、かつ医者を選ばざるための策略である。そう、彼女は妊娠しているのだ。相手は恋人の画家レアンドル(Léandre、だが本名は婚約者と同名のリュシドール)。策略は彼が考えた。

【第二幕】リュシドールはさすがに結婚を躊躇している。だが従者フィリダン(Filidan) はさかんにこの結婚の有利な点を列挙する—— そもそも妻に愛情を抱くのは流行遅れ、結婚の理由は財産しかない、それに狂った妻は好都合、夫の挙動を見張らない、嫉妬はしない、愛人ももてる、云々。リュシドールは自分はそこまで墮落していない、と言う。さて、セリの父は大祭司クリダマン(Clidamant) に娘の狂気の診断を仰ぐ。大祭司は妄想症だと判断。そこで、その種の病に詳しい巡礼女がちょうど当地に滞在しているらしいので、その女に相談することになる。

【第三幕】巡礼女とは、恋人に死んだと思われているアンジェリクだった。彼がリオンを發って約束の半年が

過ぎて戻ってこないの、絶望のあまり死んだようになってたが、息をふき返し、巡礼の名目で彼を探す旅に出た。そしてフローレンスに着いていち早く彼の婚約と婚約者の病を知り、優れた治療師だという偽りの噂を自ら広めておいたのだった。前準備は功を奏してセリの治療を引き受けることになったのはいいが、その後の展望が何もないアンジェリクは不安である。そこにセリがやってきて事情を明かし、協力を要請（恋人の名は告げない）。アンジェリクは恋と治療技術の二重の不安から開放され、喜んで承諾する。セリは皆の前でまたもや派手に狂気を演じ、アンジェリクは、極めて重症、特効薬があるがそれが効かぬば死に至る、と診断する。

〔第四幕〕 悲嘆にくれる父親に、フィリダンがご注進。セリと乳母の話を持ち聞きしたのである。セリは「リュシドール」の子を妊娠しており、伴狂は彼の差し金である、と。父親はわけがわからない。娘と婚約者は互いに気に入ってる様子はなかったし、妊娠したのなら結婚式を早めればいいだけだ。これが今時の恋愛か...と悩む父親。そこでリュシドールに会い、妊娠させたのなら早く結婚しろ、と迫る。婚約者リュシドールも困惑。そこに覗き屋フィリダンが新たな情報をもたらす。セリが父親の肖像画家レアンドルと抱き合っている現場を見たのだ。どこまでもふしだらな娘に愕然とする父親。一方アンジェリクも、セリの妊娠相手が「リュシドール」だと知らされて再度絶望に陥る。

〔第五幕〕 父親は、無垢な娘を誘惑した科で画家を巡視隊に逮捕させようとする。セリは事ここに至って真実を明かす。画家の本名はリュシドール、ヴァレンシア出の貴族で、身分に不足はないと。それを聞いたセリアントがせせら笑う。なぜなら自分もヴァレンシア出身、リュシドールとは自分の兄弟で、もう死んでいる筈だ。そこで偽画家リュシドールはこれまでの苦難の生を語る。幼い頃トルコ人に誘拐され、ビザンチンで奴隷として成長した。その後解放され、当地に流れてきてセリと恋に落ちたのである。父母の名前が口に出されてようやくセリアントは納得し、感激の兄弟再会となる。アンジェリクは、「リュシドール」とセリが結ばれると知り、彼の不実を訴える。だが人間違いだと気づき、彼女とセリの元婚約者の恋も皆の知るところとなる。そのリュシドールが連れて来られ、死んだと信じていた恋人を見て狂喜し、愛のない婚約を反省。誤解はとける。そこにアンジェリクを想い、死に挑戦する詩を作るよう主人から命じられていたフィリダンが現れ、リュシドールがそれを朗読する。皆で賞賛して幕。

（鈴木美穂）

作品梗概集

(ローマ数字は掲載号、アラビア数字はページを示す)

Bidar: <i>Hippolyte</i>	III 79	: <i>Astrate, roi de Tyr</i>	X 96
Boyer: <i>Ulysse dans l'île de Circe</i>	III 95	: <i>Atys</i>	VI 91
Corneille, Thomas		: <i>Cadmus et Hermione</i>	VI 86
: <i>Ariane</i>	III 89	: <i>Thésée</i>	VI 89
: <i>Bérénice</i>	IV 83	Mairet	
: <i>Camma</i>	III 88	: <i>Chryséide et Arimand</i>	IV 63
: <i>Circé</i>	III 98	: <i>Les Galanterie du duc d'Ossonne</i>	IV 68
: <i>Le Comte d'Essex</i>	VI 92	: <i>La Silvanire</i>	IV 66
: <i>Darius</i>	IV 85	: <i>La Sylvie</i>	IV 65
: <i>La Mort d'Achille</i>	III 9	Pradon: <i>Phèdre et Hippolyte</i>	III 81
: <i>La Mort de l'empereur Commode</i>	VI 83	Du Ryer: : <i>Alcionée</i>	X 92
: <i>Persée et Démetrius</i>	VI 85	Rotrou	
: <i>Timocrate</i>	IV 81	: <i>Agésilan de Colchos</i>	VII 94
Corneille, Pierre: <i>Andromède</i>	III 96	: <i>Amélie</i>	IX 79
Desfontaines: <i>Bélisaire</i>	VII 100	: <i>Antigone</i>	VI 80
Desmaretz de Saint-Sorlin: <i>Mirame</i>	VII 103	: <i>La Bague de l'Oubli</i>	III 83
de Visé, Donneau		: <i>La Belle Allphrède</i>	III 85
: <i>Les Amours de Bachus et d'Ariane</i>	VII 107	: <i>Belisaire</i>	VIII 98
: <i>Les Amours de Venus et d'Adonis</i>	VII 106	: <i>Captifs ou les Esclaves</i>	IX 78
Garnier: <i>Hippolyte</i>	III 74	<i>Céliane</i>	XII 71
Gilbert		: <i>Célimène</i>	VIII 84
: <i>Les Amours de Diane et d'Endimio</i>	VII 105	: <i>Cleagénor et Doristée</i>	IV 72
: <i>Hypolite</i>	III 78	: <i>Clorinde</i>	IX 81
Gougenot: <i>La Fidelle Tromperie</i>	VII 96	: <i>Cosroès</i>	IX 76
La Pineliere: <i>Hippolyte</i>	III 76	: <i>Crisante</i>	VI 78
L'Hermite de Vauzelle: <i>La chute de Phaéton</i>	III 94	: <i>Diane</i>	VIII 82
Lully et Quinault		: <i>Don Bernard de Cabrière</i>	VIII 80
: <i>Alceste</i>	VI 88	: <i>Filandre</i>	VIII 85
: <i>Amalasonte</i>	X 94	: <i>Florimonde</i>	IX 82

: <i>L'Heureux Naufrage</i>	VIII 93		
: <i>L'Hypocondriaque ou le Mort amoureux</i> X90		Tristan l'Herrnite	
<i>Iphigénie</i>	VI 81	: <i>La Folie du sage</i>	IX 84
<i>Les Ménechmes</i>	XI 77	: <i>La Marianne</i>	III 74
<i>Pèlerine amoureuse</i>	XII 72	: <i>La Mort de Chrispe</i>	IV 78
: <i>La Sœur</i>	VII 102	: <i>La Mort de Sénèque</i>	IV 77
: <i>Laure Persecutée</i>	III 86	: <i>Osman</i>	IV 80
: <i>Les Occasions perdues</i>	IV 70	: <i>Panthée</i>	IV 75
		: <i>Le Parasite</i>	X 99